

祭故平山校長文：文苑

著者	笠間, 益三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8
ページ	65-66
発行年	1892-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/3856

にきゝつるも。その實を大人に見侍りにけり。これと思ひこれを語りつゝ。せんすべをえらすぞあかる。さてもまたかゝ御いさをしを聞きつぎ語りつゝは。いふもよらなれど。數ならぬ身も御祭の庭に侍り。悲しさのあまり濃き墨もいつしか落つる涙のみづぐき深くなりて。得よむまじけれど。かひなくもかき出でゝ奉る一言を。あそれと見そなとし。みたまのふゆにより千萬のをしへ子のわざをして。いやますゝに敏く捷からしめたまひてよ。

烏部野の烟となれと天翔り見そなとすらむ國の榮えを

乾くまもあらで渡りし一とせば君をなみだの夢の浮橋

祭故平山校長文

教授 笠間益三

維明治二十五年六月八日再拜頓首謹祭故校長平山君之靈曰凡人事之興廢其理猶不可知況人之死生自有數存焉然則君之歿如未足深悲然交誼之深且厚共論史談文教務行爲如其情況豈不永思況君之德望可慕風采可追吾輩追悼不已誰謂之不宜相與談君之在日孀々不絕如縷如糸君之始長於我校恰當規模創設之際條緒未就之時能守舊貫之可仍又改弊習之太非奮勇敢之氣執公平之心周爰詢咨聿始舉開校之典朝野人士雲集唯恐後期職員生徒皆踴躍而喜以永建我校之根基歡喜

未幾而君遽就病蓐尙祈病勢之可支將發之春蘭爲暴雨所摧已明之燈光悽風吹滅之幽明相隔渺々無所隨君所親之職員皆共在於茲君所愛之學生悉共在於斯乃君之靈魂永在龍山之陽與白水之淵本省之公撰校長今又得其人緒之就條基之不動神勿疑倏忽會一画辰之至日居月諸真如駟馬并馳感想洋々永不可忘爰出所思聊寄之於辭嗚呼哀哉尙享

翻譯

晚霞丘紀念碑起工式に於ける

うねふすとるの演説

村川堅固譯

だにゑる、うねふすとる及び其演説

だにゑる、うねふすとるは、米國第一流の政治家及び演舌者にまて、千七百八十二年一月十八日を以つて、に、はんぶしややなるさりすべりに生る、幼時は兎角病多くして、体纖弱なりしがば、誰れも氏が、成人の後有せま如き屈強なる体格を、有するに至るべまとは、思はざりけり、其父母之氏が、疴弱なる身を以て、冬期學校に通ふを痛く患へたり、蓋し氏が幼時の教育は、學校よりも寧ろ家庭に於て、得られしことなるべし、

氏千八百十二年撰ばれて國會議員となり、同廿八年上院議員に選定せられ、十二年間其位地を保ちたる後、大統領となりらんに由て、國務大臣に擧げられ、同四十五年再び上院に選